



1. 第10回 BA 運営委員会を開催

4月25日原子力機構の那珂核融合研究所にて、第10回 BA 運営委員会が開催された(図1参照)。今回の運営委員会では国際核融合材料照射施設の工学実証・工学設計活動(IFMIF/EVEDA)、国際核融合エネルギー研究センター(IFERC)、サテライト・トカマク計画(JT-60SA)の3事業の2011年年次報告、更新された事業計画が承認された。

IFMIF/EVEDA 事業に関しては、超伝導ライナックの遅れによる原型加速器の統合試験期間が2年から1年となる事業計画が承認されたが、専門家の協力を得て欧州実施機関(F4E)がレビューし、その結果を反映して、加速案を提出することが事業長に求められた。IFERC 事業では、スーパーコンピュータの運用が本年1月に予定通り開始され、原型炉R&D活動の機器整備が完了し、活動が進捗していることが確認された。また核融合プラントの安全性研究が2012年から開始することが承認された。JT-60SA 事業については、ファーストプラズマを2019年3月とし、事業計画を2019年12月まで延長することが承認された。

次の運営委委員会は2012年11月6日にベルギーで開催される予定。



図1 第10回 BA 運営委員会の出席メンバー(平成24年4月25日、那珂核融合研究所)。

2. IFMIF/EVEDA原型加速器の据付調整工程等の協議

4月23～27日にかけて、IFMIF/EVEDA 原型加速器の機器が製作されている欧州の各研究所(イタリア: INFN, フランス: CEA Saclay, スペイン: CIEMAT)にて六ヶ所で行う加速器の据え付け・調整・試験のスケジュールについての日欧協議が行われた。それぞれ製作を担当している

加速器機器の開発および製作状況についての説明があり、製作工程の見学や六ヶ所に搬入する機器の据え付け調整試験の実施手順・所要期間等についての協議が行われた。

フランスでの入射器の試験については、順調に進んでおり、今年中には終了し、2013年3月六ヶ所に搬入される予定。超伝導ライナックのためのクライオプラントは2013-2014年に機器据え付け調整試験を行い、その後超伝導空洞に接続する予定。

3. 高性能計算機の本格的供用を開始

六ヶ所で運用が開始された高性能計算機(愛称“六ちゃん”)については、4月9日から日欧のユーザーによる利用が本格的に開始されている。この利用(計算機資源)に関しては、日欧国際選考枠(80%)、日本/欧州独自枠(それぞれ10%)をそれぞれ公募により配分を決めている。現在、日本において利用するアカウントを取得した研究者は原子力機構、大学等で日本の独自枠も含め74名となった。

この高性能計算機の運用については、ユーザーに円滑かつ有効に利用してもらうため、日欧から支援要員を提供している。

欧州側の高性能計算機の支援要員(HPC Team)は運転・保守およびユーザーからの高度な支援要請に対応するために11名が常駐(Bull: 1名、日本SGI: 10名)。日欧のユーザーが時差に関係なく利用可能とするため高性能計算機は24時間運転しており、HPC Teamは9時～20時(日本時間)の常駐勤務体制および24時間の監視体制を構築している。

一方、日本側の支援要員(CSC Support Team)7名は11時～20時の常駐勤務で、ユーザーの利用支援のためユーザーアカウントの発行、高性能計算機の運用状況の発信、ユーザーからの質問の受付および回答等を行っている。

4. 短い春を迎えている六ヶ所サイト

桜の開花も5月上旬という例年になく遅い春を迎えた六ヶ所 BA サイト(図2参照)だが、春の期間は短く、既に初夏の“やませ”の季節を迎えようとしている。今は山菜の季節、サイトの周辺ではタラの芽、コゴミ、ワラビなどの山菜が採れている。5月12・13日には六ヶ所村で“たのしむべフェスティバル(図3参照)”という恒例の春のお祭りが桜が満開の下開かれた。

(日本原子力研究開発機構核融合研究開発部門)

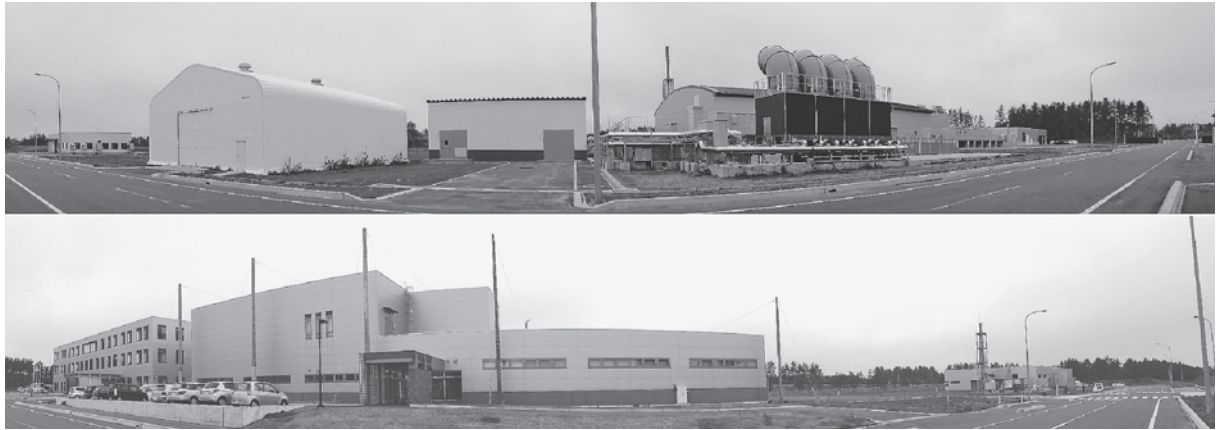


図2 春を迎えた六ヶ所BAサイト
(上：右から二次冷却設備が完成した IFMIF/EVEDA 開発試験棟，付属冷却設備建屋およびテント倉庫，研修・食堂棟，下：右から原型炉 R&D 棟，計算機・遠隔実験棟，管理研究棟)

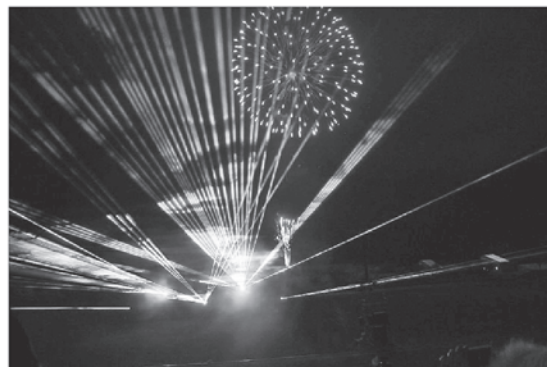


図3 六ヶ所村のたのしみベフェスティバル (左上から準備中の原子力機構のテント，桜(ソメイヨシノ)満開の会場の大石運動公園周辺，出店，夜の花火大会)。